

名古屋大学

NUA  
nagoya university archives

## 大学文書資料室ニュース

Nagoya University Archives News 第18号 2005. 3

目次

Contents

八高と八高会（名誉教授・山田録一）	2
八高会から寄付金を受贈 贈呈式おこなわれる	3
漫画帖「八高生のぞ記」（大学文書資料室長・加藤鉦治）	4
大学文書資料室が本部別館へ移転 看板上掲式おこなわれる	6
資料室だより	8
資料室日誌（抄）	9
全学同窓会総会と関西フォーラムで展示をおこないました	10



左上・右下 = 『八高生のぞ記』（4～5頁参照） 右上 = 明治村正門（旧八高正門） 左下 = 八高開校記念絵はがき（大島初代校長と正門）

# 八高と八高会

名古屋大学名誉教授 八高会会長 山田 鏡一

八高(正式名は第八高等学校)は、明治41(1908)年、旧制高校最後のナンバースクールとして名古屋市南部、瑞穂ヶ丘(現在の名古屋市瑞穂区瑞穂町)の地に設立された。旧学制には複数の就学過程があった。その1つが、中学校(5年) 高等学校(3年) 大学(3年)という過程であった。この高等学校を旧制高校といい、中学4年を終了すると、この高校の受験資格が得られた。

初代校長大島<sup>よしなが</sup>義脩は、情熱をもって独自の新教育制度を採り入れた。指導教官制度、兵式体操を導入し、選手制度や応援団を禁止した。しかし、こうした教育方針も時代の波には抗し切れず、大正10年第三代校長芝田徹心を迎えると、選手制度や応援団が認められ、四高との定期戦が始まり、インターハイでの活動もさかんになった。

昭和に入り、左翼運動が起こり、昭和5～6年の八高生検挙事件により、数多くの除名退学者が出た。その後、日中事変、第二次世界大戦により、八高の運命も大きく左右された。昭和20年3月、名古屋空襲により八高の校舎のほとんどが焼失したが、終戦後の昭和22年に木造の校舎が瑞穂ヶ丘に復活した。そして昭和25(1950)年学制改革により閉校、40年間の八高の歴史に終止符が打たれた。

八高は名古屋大学に吸収され、八高のほとんどの教官は当時の教養部(現在の情報文化学部)、文学部、経済学部等に配属された。学籍簿等は教養部に保管され、現在に至っている。教養部キャンパスの瑞穂地区から東山地区への移転は、昭和39年3月に完了した。

八高の寮歌は約80曲あるが、その代表寮歌は「伊吹おろし」であり、大正ロマンを象徴するこの歌は名古屋大学にも継承され、運動部等で愛唱されていると聞く。

八高には、他の旧制高校と同様に、識見に優れた教官が多かった。そして、その教育は非常にレベルの高いものであり、全人格的なゆとりのあるものであった。旧制高校の教育を「大日本帝国の贅沢品」と評するものもいるが、エリート教育として最高の傑作であるといつてよいであろう。

八高会とは八高の同窓会のことである。すべての旧制高校が、閉校後も同窓会組織をもち、記念祭や寮歌祭で活発な活動をしてきた。

昭和25年8月に、八高卒業生は東京で同窓会を設立し、会報『瑞陵』を創刊した。そ



のため、東京八高会が全国的八高会であるとの認識が生じた。名古屋八高会の発足は東京より約4年遅れた昭和29年のことであり、会報として『やつるぎ』が同年8月に創刊された。その後、関西八高会等各地区の八高会が相次いで創立されるにいたった。このような複数の八高会並立の状態は不自然であり「八高会は一つであり、一つでなければならない」という八高会統合化の気運が生じた。そのための会合が平成11年9月に名古屋で開催され、数回の会議ののち、平成13年に至り漸く全国統合の意見がまとまり、同年6月16日の設立総会で八高会の一本化が承認されることになった。その骨子は、本部と事務局を名古屋に置き、名古屋八高会、東京八高会、関西八高会等の各八高会をもって一つの八高会を構成し、会報を『伊吹おろし』一本にするというものである。

八高卒業生は総数10,010名であるが、平成16年11月末現在の生存者は約2,700名、八高会会員は1,437名である。旧制高校同窓会の解散が相次いでいるが、八高会は平成20年に予定されている創立100年記念祭を幕引きの目途としている。

現在、八高・八高会関係の資料は、名古屋市博物館、松本市の旧制高校記念館に一部保管・展示されている。上記の関係資料は、八高卒業生の手もとにまだかなりあるものと考えられる。これらの資料が文化遺産として、名古屋大学大学文書資料室に永久保存されることを希求してやまない。

なお、すでに平成10年の創立90年祭のとき、名古屋大学構内に、八高卒業生で著名な中国人作家郁達夫(ユーターフ)文学碑が建設されたことを付記しておく。

# 八高会から寄付金を受贈

## 贈呈式おこなわれる

大学文書資料室は、活動助成金として八高会から50万円の寄付金を受贈しました。本室では、名古屋大学史における旧制第八高等学校の位置を重視し、関係資料の収集とその歴史の研究に努めています。八高会からは、所蔵資料の寄贈はもとより、機関紙などにおける資料提供の呼びかけなど、全面的な支援をいただいています（八高と八高会については、前頁をご覧ください）。

さらにこの度、八高会の機関紙が現在の『伊吹おろし』に一化される前の、名古屋八高会の『やつるぎ』、東京八高会の『瑞陵』、そして東海地方の旧制高校出身者でつくる東海学士会の機関紙『東海』を当室に寄贈いただくと同時に、これらをマイクロフィルム化、CD化して、資料保存と活用の便をはかることになりました。上の寄付は、この事業の助成のためになされたものです。

そして2月10日、総長応接室にて、寄付金贈呈式がとりおこなわれました。八高会からは、山田録一会長、青木幸一郎理事長、加藤一三、赤津敏、波藤雅明各常任理事などが、本学からは平野眞一総長、山下廣順理事、佐分晴夫法学研究科長、千葉秀夫総務企画部長、

加藤証治大学文書資料室長などが列席しました。

目録の贈呈を受けた平野総長は、本学はこれまでたどってきた歴史を明らかにすることを重視しており、第八高等学校についても、大学文書資料室を中心にして、名大史の中にしっかりと位置づけていきたいと挨拶されました。贈呈後の懇談では、総長が八高の前身にあたる本学教養部（現情報文化学部）で学ばれたことも話題になりました。

また八高会の山田会長は、3年後の八高創立100周年を区切りに八高会は解散の予定であること、それに向けてさらに本室を支援していく考えであることを述べられました。

本室も、八高会との連携をいっそう密にし、八高史の研究と関係資料の収集に鋭意取り組んでいきます（来年度には、八高をテーマにしたブックレットを刊行する予定です）。つきましては、八高（会）関係の資料の情報がございましたら、どんな些細なことでも当室まで御一報いただけたらと思います。

なお、この贈呈式の模様は、翌日の『中日新聞』朝刊の県内版で詳しく報じられ、多くの関心呼びました。



# 漫画帖 『八高生のぞ記』

大学文書資料室長 加藤 鉦治（詔士）

## （１）

旧制高校というと、弊衣破帽、ばんカラな校風が連想される。いまも開かれる寮歌祭には、そんな雰囲気がよくあらわれている。青春を謳歌した学生たちであった。

そうした学生の生態を活写する資料というと、何といても「回想記」が重要であろう。当事者の手になるだけに、第一級の史料である。単著にまとめられるばあいもあるが、同窓会の機関紙などに寄稿されるばあいがおおい。写真も添えられれば、一段と生彩を放つことになる。

第八高等学校のばあい、同窓会の機関紙として『瑞陵』（東京八高会）、『やつるぎ』（名古屋八高会）それらが一本化した『伊吹おろし』があるが、そのうち、『やつるぎ』のなかには、「おれの寮生活」とか「おれの仲間」などといった連載が組みこまれており、ここに回想記が卒業年次ごとに収められているから、学生の姿とその変容ぶりをうかがうことができる。

もう一つ、学生の文化や生活を伝える忘れてならない資料に「漫画」がある。ロンドンの風刺漫画週刊誌『パンチ』、それを模して明治はじめの横浜で生まれた『ジャパン・パンチ』あるいは『団団珍聞』が、いかに「時代と世相を映し出す鏡としての役割を果たすことができた」か、また「独特のリアリティと迫力を備えた生きた証人」であったか、よく知られる世相風俗をとどめる貴重な同時代資料なのである。

第八高等学校には、『八高生のぞ記』という興味ある漫画集がある（八高会所蔵）。もともとは昭和3（1928）年の創立20年記念祭のときに売り出された漫画集であって、全部で24点からなる。経本のように、じゃばら式に綴じられた画帖の形式になっているからおもしろい。表紙は、手ぬぐいを腰に下げた学生が、ズボンの中から股のぞきをしている絵柄である。ズボンのお尻のところは擦り切れていて、つぎ布があてられている。「のぞ記」というタイトルといい、股のぞきの表紙絵といい、興味本位に裏側からこっそり眺めた、一種の裏面史の性格がうかがわれる。

漫画ははがき大で、これにキャプションと150字から170字ほどの寸評ないし説明文（リジェンド）がついており、これも抱腹絶倒の内容である。主題は順につきのとおりであって、入学ないし入寮から卒業まで、学校および寮での勉学と生活のエッセンスが描かれている。とくに興味深いのは、学寮での生活と年中行事、

日々の過ごし方が伝えられていることであって、寮での活気に満ちた多彩な活動が、鋭く的確に描きだされている。

入寮、ホームシック、点検、コンパ、デカンショ踊り、寮雨、夏の午後、寮歌合唱、寢室、応援団、戦近し、帰省、試験の前夜、合奏、行軍、消耗、ストーム、発展、腹が空いちやア戦が出来ねえ、兎狩、しるこ、糞と飯とで五分間、敗因、四年生

昭和3年ころの制作ということ、小松原隆二校長の時代である。大正浪漫主義の横溢するなか、学生たちは多彩な行事を楽しみ、自由と友情を享受し青春をまだ謳歌できたのだった。

## （２）

『八高生のぞ記』の24点の漫画は、いずれも興味深いものばかりである。

そのうち、「点検」とは学寮室の点検のことである（本号の表紙参照）。方式は時期により一定していないが、だいたい「平日は夜の十時より、休日の前夜は十時半より点検がある」。しかし、寮生は「点検が終つても、仲々おとなしく眠るやうな消耗野郎じやアない。塀乗り越えて『特製支那そば』を追跡したり、コンパをやつたり、ストームで暴れたりして二時頃にやつと寝るような始末」だった。「不足の分は教室で講義を子守歌として眠るから、御心配下さるな。」とあるから、おもしろい。

「寮雨」とは、学寮の部屋の窓から外にむかって放尿すること。第一高等学校から伝わったらしい。便所が遠い所にあったからとか、「部屋から出るときは制服を身につけなければいけないのであって、着流して寮内を歩くことは許されていなかった」からとかいわれてはいたけれども、悪習にちがいない。非常識の極みである。デカンショ節では、「寮雨肅々襟元寒し、月が見かねて顔隠す」などと歌われている。「時間と労力の経済のために、我輩等最も卓越せる人格者は寮雨と称する至極便利な方法で、身を軽くし、以つて青春を最も友好に費さうとする」との説明があるが、一階の寮生には迷惑至極である。夏になると臭うことはなはだしい。

「ストーム」とは、よく知られているように、学校の寮などで「夜、大勢が歌を高唱したりして騒々しく練り歩くこと」をいう。漫画では、坊主頭の若者6名が下着一枚で、なかには下着もつけず丸裸で、朴歯の

下駄をつっかけ、棒を手にして高唱して乱舞するさまが描かれている。説明文には、

「ストーム厭だと寝てある奴は コリヤ コリヤ  
蚤に蹴られて死ぬがよい ヨーヨーイデカンシヨ  
他の寮の奴等の安眠妨害どころではない、  
水や寮雨をひっかけられて、疲れ切つた足を伸して  
喘ぐ頃にやア夜が明ける。

だがそこが八高生の可愛いところさ」

とある。街頭ストームもあって、市内の栄あたりまで繰りだして放歌高吟したのだった。

「兎狩」は、学寮の年中行事のひとつであった。冬になると、名古屋市郊外の小幡ヶ原まで出かけ原っぱを走りまわって兎を追いかけた。当時、小幡ヶ原の北の丘陵地には、ツツジに似た背の低い灌木がバラバラと生えていた。あらかじめ獵場の端の稜線に高さ50センチ、幅50メートルほどの網を、上部は灌木の枝にかけ、下端を地面につくように張っておく。学生は半円形に布陣し、獵師の合図で「ホーイ、ホイホイ」と叫びながら駆りたてる。人の輪を列が崩れないように網のほうへ縮めてゆくと、野兎が走りだすのがみえる。兎は網を飛びこえるのではなくて、網の下にもぐろうとする習性があるから、もぐったらその上に人が倒れこんで捕らえるのである。獵師にわたすと、「前脚と後脚を強く引張って、腰の関節を外す」処理をしてくれた。「これをしないと、捕えた兎の後脚で蹴られると、人間の腕など簡単に折れてしまう」からだそうである。

兎狩りの最初は、明治43（1910）年の2月19日、高蔵寺付近でおこなわれた。「この時は捕獲した兎は一匹で翌日の夕食に各人に微量づつ行き渡った」。やっと捕った一羽か二羽の兎でも、いばって持ち帰り兎汁にしたものである。「寮生百八十人で食う時には案外肉が多いから豪気である。兎の肉は余程膨張するらしい」との説明文がおもしろい。

獵が終わった夕刻に、炊き出しが用意されたこともあった。狩場の丘陵の南端に獵師の家があって、その横の松林にまん幕を張って風よけにした。むしろをひき、腰をおろして炊き出しを食べる。あつい豚汁とご飯であった。兎があまり捕れなくなると、全員の分には足りないので、用意してもっていった豚をまぜてみそ汁を作ることもあった。ふうふうと熱い汁をすすった。多治見やその近辺などでもおこなわれた。

寮では、冬になると、各室にダルマストーブがはいる。「しるこ」と題された漫画（本号の表紙参照）では、そのダルマストーブのまわりに3人の学生が集まり、食しながら駄弁している。夕食を済ませてから、家からもってきた餅でしるこを作ったのであろう。「冬になるとしるこや雑煮が寮の各室で盛んに流行る。なにしろ十銭で五杯位食べるんだから大分違はア。少なくなると水を薄めては食ふので仲々終らない」。消灯後も、乏しい石炭が尽きるまで駄弁っていたにちがひ

ない。真っ赤に焼けけたストーブを囲んで雑談したり、トランプをしたり、宿直の教官がときおりやって来て歓談するので、団樂の家庭的空気がいっそう濃くなる。

漫画帖『八高生のぞ記』は、以上のように、「回想記」などで綴られた勉学や生活の生態が生き生きと裏づけられている。まさに学生文化史ないし生活史上の貴重な資料である。

（3）

『八高生のぞ記』は、昭和3（1928）年の創立20年記念祭のときに製作されたのだが、それから30年後、『八高五十年誌』（昭和33）のなかに再録されたことで、一段と広く知られるようになった。

同誌は創立五十周年記念事業のひとつとして刊行されたもので、沿革史、回想記、記念事業記録などを含んでいる。口絵には往時の写真が、巻末にはこの漫画が配されており、関係者の母校に寄せる愛情が横溢している。誠意ある制作ぶりが随所にうかがわれる。

50周年という節目であっただけに、記念誌づくりは精力的に取り組みされた。同窓会紙『やつるぎ』などで、資料や記録の提供が呼びかけられると、数々の物品が寄せられた。この漫画帖『八高生のぞ記』も、呼びかけにこたえて、東京から蒲生英男氏（第17回卒）が持参され貸与されたものである。

『八高生のぞ記』は、自由と友情と青春を謳歌する八高生の生態を、漫画という形で生き生きと伝える興味ある資料であるだけに、そのごも何度か活用されている。65周年記念誌『伊吹おろしの雪消えて』（昭和48）、80年祭記念誌『わが友若き旅人よ』（昭和63）のなかにも、全部あるいは一部が収録された。

冊子体の記念誌のなかに再録されただけではない。まず、東京八高会の機関紙『瑞陵』に掲載された。同紙の200号（昭和46年6月）から223号（昭和48年5月）までであって、これは壺井玄剛氏（第19回卒）が、当時「生徒集会所で販売していたのを求められた」ものを借用して掲載した由である。さらに、現在もまた、機関紙『伊吹おろし』に、575号（平成16年6月）から毎月1点づつ連載されており、好評を博している。これは、利根川勉氏（第20回卒、ノーベル賞受賞者利根川進教授の父君）が八高会に寄贈されたものである。氏もまた、昭和3年の創立20年記念祭の会場で求めたといわれる。

ただし、漫画の作者については不祥である。いずれの漫画も「K.I.I.」という筆名入りであるが、いったいかれは誰なのか。目下調査中である。



『八高生のぞ記』表紙

# 大学文書資料室が本部別館へ移転 看板上掲式おこなわれる

昨年12月、これまで共同教育研究施設にあった大学文書資料室が本部別館に移転しました。22日に移転を完了し、24日から業務を開始しました。

この本部別館は、昨年3月に廃止された文部科学省名古屋工事事務所があった施設を改修したものです。位置は地図の通りです。学内からは、徒歩なら理系食堂脇の階段を一番上まで登って行くルートと、車なら農学部側からのルートがあります。また外周道路から車で直接駐車場に入ることもできます。同館には本室のほか、男女共同参画室が移転しました。

この移転により、本室の総床面積は約340㎡となり、これまでの約220㎡から大幅に増加しました。また書庫も、2階書庫は約80㎡と前施設と変わりませんが、改修工事により1階部分に書庫を新設し、約70㎡の増加となりました。また本部別館は2階に入口がありますが、本室ではスロープを増設し、資料の搬入のみならず、いわゆるバリアフリーにも対応した設計になっています。また外周道路に面していることから、厳重なセキュリティシステムを導入して夜間などの安全を確保しました。

本室に入りますと、まず受付カウンターがあり、閲覧希望者にはここで申請をしていただきます。資料の検索は、本室が刊行した『保存資料目録』や本室ホームページの検索システムが利用できます。また専任の室員が待機しておりますので、レファレンスにも応ずることができます。複写希望にも対応が可能です（資料の状態によっては、おことわりする場合があります）。

本室では書庫は全て閉架になっており、資料の出納は記入いただいた閲覧申請書にもとづき室員がおこないます。資料の閲覧は、閲覧コーナーでしていただきます。また同コーナーでは、本室が製作して全学同窓会総会や関西フォーラムで上映した、コンピューターグラフィックを用いたスライドショー「名古屋大学のあゆみ キャンパスの変遷」(25分)を自由にご覧いただくことができるようになっています。

本室に所蔵されている資料としては、本学の前身諸学校関係の資料が充実しています。現物は少なく、複

写やマイクロフィルムが多いのは残念ですが、内容的には歴史的価値が高く、研究者による利用頻度も高くなっています。また戦後期では、『名古屋大学五十年史』の編さんに用いられた書籍類が多くあります。学内各部局の印刷物も、時代の新旧を問わず収集に努めています。

さらに、多くはまだ非公開ですが、歴代総長をはじめとする退職教員から寄贈を受けた諸資料も多く所蔵しており、現在整理を進めています。そして研究室では、これらの資料を用いて名古屋大学史や高等教育史の研究を進めるとともに、資料保存などのあり方を記録史料学によって研究しています。

さて、昨年4月に改組改称された本室ですが、今回の移転を機会に新しい看板を掲げることになりました。リニューアルした本室の再出発にふさわしく、看板の揮毫を平野眞一総長にお願いし、上掲式にも御出席いただきました。その上掲式は、2月3日、総長のほか、本室協議委員会委員長の山下廣順理事、中島泉理事、森英樹理事、若尾祐司理事、渡橋正博理事をむかえ、おおぜいの関係者が見守る中、盛大にとりおこなわれました。男女共同参画室の移転披露式も、本室と合同で同時に開催されました。

総長は挨拶において、本室がこれまでの歴史資料館としての機能に加え、公文書館としての新機能を備えたことの重要性に言及し、その活動への大きな期待を述べられました。また同時に今回の移転を、本室が「大学文書館」へと発展していく第一歩であると位置づけられました。

このように本室は、本部をはじめとする各部局の支援と協力により、かねてよりの目標であった施設と機能の拡大を達成したわけですが、課題も少なくありません。最も大きな問題は、機能の拡大にともない業務の肥大化は避けられず、現在の人的体制（併任教授1、専任助手2、専門職員1、パートタイム勤務職員3）ではこれらへの対応が難しいことです。さらに書庫についても、今回増設されたとはいえ、これから保存年限の切れた各部局の法人文書が大量に移管されてくることを考えると、中間保管庫をふくめた資料所蔵

スペースの大幅な拡充が不可欠です。

大学アーカイブズ（文書館）は、これからの大学において図書館や博物館と並ぶフロント施設になるものと考えられており、本室もそれをめざしています。本

室は、図書館や博物館との連携を密にすると同時に、本部や各部局からの理解と協力を得ながら活動を展開していきます。



本部別館（大学文書資料室）



大学文書資料室のスタッフ



大学文書資料室の内部



看板の上掲（2月3日）

### お詫びと訂正

前号の7頁に掲載した楽譜に誤植がありました。第13小節の部分で、正しくは下記の通りです。当方の不注意をお詫びし、訂正させていただきます。



資料室だより

『豊田講堂 Toyoda Auditorium』、  
『名古屋大学の法人化と展開』、  
『ちょっと名大史』（増補版）を刊行しました

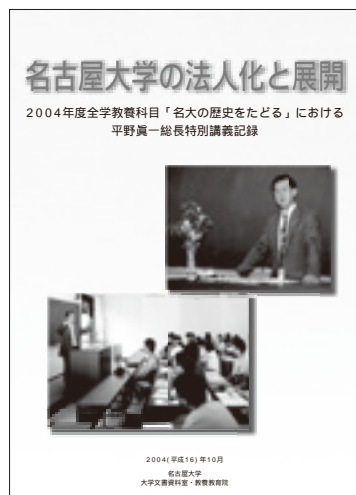
大学文書資料室では、昨秋に上記3冊の出版物を上梓しました。

『豊田講堂 Toyoda Auditorium』（9月刊行）は、『名大史ブックレット』シリーズの第9巻になります。豊田講堂については、主に建築学的な視点から、すでに第4巻の『豊田講堂と古川図書館』で取り上げています。本書では、豊講が本学に寄付された経緯や、本学における豊講の存在意義などに焦点をあてました。

『名古屋大学の法人化と展開』（10月刊行）は、当室が担当する2004年度前期全学教養科目「名大の歴史をたどる」において行われた、平野眞一総長による特別講義の記録です。講義の録音記録を活字化し、当日の配布資料と聴講者の感想文などを掲載しました。全学教養科目が行われている教養教育院と共同で刊行したものです。

『ちょっと名大史』は、本学広報紙『名大トピックス』の裏表紙に当室が連載する、「ちょっと名大史」をまとめて単行冊子にしたものです。すでに昨年、第18回連載分までを収録したものを刊行しましたが、第30回連載分までを増補しました。

上記の刊行物をご希望の方は、裏表紙の連絡先まで郵便、FAX、E-mailでお申込みください。また『名大史ブックレット』第1～10巻、『保存資料目録』第3～5集（第1～2集は在庫切れ）名古屋大学国際フォーラム特別展示『名古屋大学の軌跡 国際社会と知的交流』のパンフレットおよびそのCD-ROM版も無償で配布しておりますので、こちらについてもご連絡をお待ちしています（郵送料はご負担願います。ブックレット10、目録5は2005年3月末刊行予定です）。





## 資料室日誌（抄）

- 8月4日 黎明会加藤貞夫氏より資料受贈。
- 8月18日 山口拓史室員、調査のため立正大学、国立国会図書館に出張（～19日）
- 8月27日 総務企画部総務広報課より資料移管。
- 9月13日 山口室員、堀田慎一郎室員、総長裁量経費による資料保存対策プロジェクト第1回ミーティングに出席。
- 9月18日 山口室員、京都大学大学文書館による科研費第1回研究会に出席（京都・芝蘭会館別館）。
- 9月27日 総務広報課より資料移管。
- 9月30日 『名大史ブックレット』第9巻、『名古屋大学大学文書資料室ニュース』第17号を刊行。
- 10月4日 全学教養科目「情報公開と文書資料 文書の世界を歩く」開講。  
広報プラザ（総務広報課）より資料移管。
- 10月6日 山口室員と堀田室員、全国大学史資料協議会総会および全国研究会に出席（京都大学、京都府立総合資料館、～8日）。山口室員、同研究会にて報告。
- 10月17日 全学同窓会第3回総会に、名大史についてのパネル、キャンパス模型3体、スライドショー「名古屋大学のあゆみ」を出展。
- 10月20日 『名古屋大学の法人化と展開』（総長特別講義記録）を教養教育院と共同で刊行。  
森正夫名誉教授来室、資料受贈（11月17日、12月17日、1月25日にも来室、資料を受贈）。
- 11月10日 東京八高会より資料受贈。
- 11月15日 『ちょっと名大史』増補版を刊行。
- 11月17日 名古屋大学関西フォーラム（大阪国際交流センター）の「名古屋大学のあゆみ」コーナーに、展示パネル、キャンパス模型、スライドショーを出展。
- 12月1日 八高会から山田録一会長、青木幸一郎理事長が来室。
- 12月3日 加藤鉦治室長、名古屋市博物館を訪問し、八高会資料について協議。
- 12月7日 堀田室員、全学教養科目「未来の大学像をつくる」（近田政博助教授）にゲストスピーカーとして参加。
- 12月13日 本部別館への移転開始。
- 12月16日 山口室員、堀田室員、名古屋市博物館を訪
- 問し、八高会資料を写真撮影。
- 12月18日 山口室員、堀田室員、京都大学大学文書館による科研費第2回研究会に出席（京都・京大会館）。
- 12月22日 本部別館への移転完了（24日から業務開始）。  
『中日新聞』朝刊県内版に『名大史ブックレット』第9巻と本室紹介の記事が掲載される。
- 12月27日 山口室員、堀田室員、齋藤英彦名古屋医療センター院長を訪問し、資料を撮影のため借用。
- 12月28日 大学院工学研究科研究室より資料受贈。  
資料保存対策プロジェクトによる温湿度自動記録計を設置。
- 1月6日 日本赤十字豊田看護大学の村地俊二学長より資料受贈。  
若尾祐司副総長、山口博行施設管理部長、移転後の本室視察のため来室。
- 1月12日 第3回大学文書資料室運営委員会終了（持ち回り審議）。  
本室パートタイム勤務職員公募を告示。
- 1月18日 第2回大学文書資料室協議委員会開催。  
各部局に平成15年度学内印刷物の提供依頼を送付。  
定年退職予定教員に資料提供の案内送付。
- 1月24日 塩野谷恵彦名誉教授と許斐ナタリー国際学術コンソーシアム助教授、資料調査のため来室。
- 1月25日 山口室員、堀田室員、池田涌子氏宅を訪問し、資料を受贈。
- 1月27日 第2回名古屋大学東京フォーラムにスライドショー出展、加藤室長が同フォーラムに出席。
- 1月31日 京都大学大学文書館による科研費第3回研究会を名古屋大学で開催（加藤室長、山口室員、堀田室員、坪井直志専門職員出席）。  
山口室員、同研究会にて報告。
- 2月3日 本室看板上掲式を挙行（総長、理事など出席）。
- 2月10日 八高会からの寄付金贈呈式（総長応接室）。  
式後、八高会列席者が資料室視察。

## 全学同窓会総会と関西フォーラムで展示をおこないました

大学文書資料室では、昨年10月17日に豊田講堂で開催された名古屋大学全学同窓会（NUAL）総会において展示をおこないました。テーマは、前身諸学校をふくめた名大キャンパスの歴史です。

パネル展示は、本室が一昨年12月に東京で開かれた名古屋大学東京フォーラムに出展したものに、若干の改訂を加えたものです。施設管理部の協力も得て、キャンパスや諸施設の変遷を紹介しました。

そして今回、新しく出展したのが、東山キャンパスの模型とスライドショーです。

東山キャンパスの模型は3体あり、いずれも1m×1.6mの大きさです。最初の1体は、名古屋帝国大学が創立された1939（昭和14）年に取得した当時の東山敷地の地形を再現したものです。2体めは、敗戦直後の1946年、まだ理学部と工学部の一部しかなかった時期の東山キャンパスです。そしてもう1つは、ふだんは本部1号館玄関に設置されている現東山キャンパスの模型です。これは総務企画部総務広報課の協力を得て、最新の状態で改修したうえで展示しました。

スライドショー「名古屋大学のあゆみ キャンパスの変遷」は、今回のパネル展示と模型展示を、CGなどを用いながら分かりやすく解説したものです。第一部「名大キャンパスの変遷」（10分）と第二部「東山キャンパスの発展」（15分）からなっています。第一部では、前身諸学校をふくめた、これまでのほぼ全てのキャンパスについて紹介し、名大が現在の3つのキャンパスにまとまるまでを概観しました。第二部は、今回の模型と当時の写真を利用しながら、東山キャンパスが開発され、各学部が集結していく様子を特集したものです。

いずれも来観者に好評を博したため、総長の要請を受けて、昨年11月17日に大阪で催された名古屋大学関西フォーラムでも同様の展示をおこないました。スライドショーについては、大学文書資料室の資料閲覧コーナーで自由に見ることができます。



展示を観覧する豊田章一郎全学同窓会会長と平野真一総長



関西フォーラムの展示

名古屋大学大学文書資料室ニュース 第18号  
Nagoya University Archives News No. 18

名古屋大学大学文書資料室

室長 加藤 鉦治（教授・併任）  
専任室員 山口 拓史  
堀田 慎一郎  
専門職員 坪井 直志  
事務員 増田 よしみ

発行日 2005年3月31日（年2回刊）

編集行 名古屋大学大学文書資料室

名古屋市千種区不老町〒464-8601

電話：(052) 789-2046

FAX：(052) 788-6222

E-mail: nua\_office@cc.nagoya-u.ac.jp

印刷 株式会社荒川印刷

名古屋市中区千代田2-16-38